

柏崎

江波左衛門作

前

ワキ 柏崎殿の家臣小太郎

シテ 柏崎殿の妻

後

子方（謡なし） 子息花若

ワキヅレ 善光寺住僧

シテ（狂女） 前に同じ

地は 前は越後 後は信濃

季は 十月

「夢路も添ひて古郷に。く。帰るや現なるらん。

「是は越後の国柏崎殿の御内に。小太郎と申す者に候。さても頼み奉りし人は。訴訟の事候ひて。在鎌倉にて御座候ひしが。唯かりそめに風の心地と仰せ候ひて。程なく空しくなり給ひて候。又御子息花若殿も。同じく在鎌倉にて御座候ひしが。父御の御別れを歎き給ひ。何くともなく御遁世にて候。さる間花若殿の御文に。御形見の品々を取

りそへ。只今故郷柏崎へと急ぎ候。

「乾しぬべき。日影も袖やぬらすらん。く。今行

く道は雪の下。一通り降る村時雨。山の内をも過ぎ行けば。袖さえまさる旅衣。碓氷の峠うちすぎて。越後に早く着きにけり。く。

「急ぎ候ふほどに。故郷柏崎に着きて候。まづく案内を申さうずるにて候。如何に申し候。鎌倉より小太郎が参りて候ふそれく御申し候へ。

シテ詞

「なに小太郎とは。もし殿の御帰りありたるか。あらめづらしや何とて物をば申さぬぞ。」

ワキ

「さん候ふ是までは参りて候へども。何と申し上ぐべきやらん。更に思ひも弁へず候。」

シテ

「あら心もとなや。物をば申さでさめぐと泣くは。さて花若が方に何事かある。」

ワキ

「さん候花若殿は御遁世にて御座候。」

シテ

「何と花若が遁世したるとは。さては父の叱りける

か。など追手をばかけざりしぞ。」

ワキ

「いや左様にも御座なく候。様々の御形見の物を持ちて参りて候。」

シテ

「何さまぐの形見とは。さては花若が父の空しくなりたるな。此程はそなたの風もなつかしく。便りもうれしかりつるに。形見をとくる音信は。中々聞きて恨めしきぞや。たゞ仮初に立ち出で。やがてと言ひし其主は。」

地 「昔語りに早なりて。形見を見るぞ涙なる。

ロンギシテ

「さてや最期の折節は。いかなる事か宣ひし。委しく語りおはしませ。せめては聞いて慰まん。

ワキ

「唯故郷の御事を。おぼつかなく思し召し。御最期までも人知れず。ひそかに御錠ありしなり。

シテ

「実にやさこそはおはすらめ。三年離れて其後は。我も御名残。いつの世にかは忘るべき。

ワキ

「御ことわりと思へども。歎きをとゞめおはしまし。

形見を御覧候へ。

シテ

「実にや歎きても。かひなき世ぞと思へば。

地

「形見を見るからに。すゝむ涙はせきあへず。

ワキ詞

「花若殿の御文の候。これを御覧候へ。

シテ

「さてもく父御前。痛はりつかせ給ひ。程なく空しくなり給へば。心の内の悲しさは。唯おぼしめしやらせ給へ。我も帰りて御ありさま。見参らせたくは候へども。思ひ立ちぬる修行の道。もしや

止められ申さんと。思ふ心を便りにて。心づよくも出づるなり。命つれなく候はゞ。三年が内には参るべし。様々の形見を御覧じて。御心を慰みおはしませと。書いたる文の恨めしや。

下歌地

「なからん父が名残には。子ほどの形見あるべきか。

上歌

「父が別れは如何なれば。く。悲しみ修行に出づ

る身の。などや生きてある。母に姿を見みえんと。思ふ心のなかるらん。恨めしの我子や。うき時は。

恨みながらもさりとては。我子のゆくへ安穩に。守らせ給へ神仏と。祈る心ぞあはれなる。く。

(中入)

僧詞

「かやうに候ふ者は。信濃の国善光寺の住僧にて候。

又是に渡り候ふ人は。いづくとも知らず愚僧を頼むよし仰せ候ふ程に。師弟の契約をなし。此ほど出家させ申して候。さる間毎日如来堂へ伴なひ申し候。今日も又参らばやと思ひ候。

後ジテ詞

「是なる童部どもは何を笑ふぞ。何物に狂ふがをかしいとや。うたてやな心あらん人は。訪ひてこそたふべけれ。それをいかにといふに。夫には死して別れ。唯ひとり忘れ形身とも思ふべき。子の行方をも白糸の。」

地

「乱れ心や狂ふらん。」

シテサシ

「実にや人の身のあだなりけりと。誰かいひけん空言や。又思ひには死なれざりけりと。よみしもこ

とわりや。今身の上に知られたり。是もひとへに

夫や子の。故と思へば恨めしや。

下歌地

「うき身は何と檜の葉の。柏崎をば狂ひ出で。」

上歌

「越後の国府に着きしかば。く。人目も分かぬ我

姿。いつまで草のいつまでと。知らぬ心は麻衣。

浦はるぐと行くほどに。松風遠くさびしきは。

常磐の里の夕べかな。我にたぐへて。あはれなる

は此里。子故に身をこがしゝは。野辺のきじまの

里とかや。降れどもつもらぬ淡雪の。浅野といふ
は是かとよ。桐の花咲く井の上の。山を東に見な
して。西に向へば善光寺。正身の弥陀如来。わが
狂乱はさておきぬ。死して別れし。夫を導きおは
しませ。

僧詞

「いかに狂女。御堂の内陣へは叶ふまじきぞ。急い
で出で候へ。」

シテ

「極重悪人無他方便。唯称弥陀得生極楽とこそ見え

たれ。

僧

「是は不思議の物狂ひかな。そも左様の事をば誰が
教へけるぞ。」

シテ

「教へは本よりみだ如来の。御誓ひにてはましまさ
ずや。唯心の浄土と聞く時は。此善光寺の如来堂
の。内陣こそは極楽の。九品上生の台なるに。女
人の参るまじきとの御制戒とはそもされば。如来
の仰せありけるか。よし人々は何ともいへ。声こ

そしるべ南無阿弥陀仏。

地

「頼もしや。く。」

シテ

「釈迦は遣り。」

地

「弥陀は導く一筋に。こゝを去ること遠からず。是

ぞ西方極樂の。上品上生の。内陣にいざや参らん。

光明遍照十方の。誓ひぞしるき此寺の。常の灯影

頼む。夜念仏申せ人々よ。夜念仏いざや申さん。

シテ
詞

「いかに申し候。如来へ参らせ物の候。此烏帽子直

垂は。別れし夫の形見なれども。形見こそ今はあ

だなれ是なくは。忘るゝひまもあらまし物をと。

よみしも思ひ知られたり。是を如来に参らせて。

夫の後生善所をも。祈らばやと思ひ候。あらいと

ほしや此烏帽子直垂の主は。よろづ何事につきて

も闇からず。弓は三物とやらんを射そろへ。歌連

歌の道も達者なりし上。又酒盛などの折節は。い

で人々に乱舞まうて見せんとて。鎧直垂とりいだ

し。衣紋うつくしく着ないて。へりぬり取つて打ちかづき。手拍子人に囃させて。扇おつ取り。鳴るは滝の水。

地クリ

「それ一念称名の声の内には。摂取の光明を待ち。聖衆来迎の雲の上には。

シテ

「九品蓮台の花散りて。

地

「異香みちくゝて人に薰じ。白虹地に満ちて連なれり。

シテサシ

「つらく世間の幻相を観ずるに。飛花落葉の風の前には。有為の転変をさとり。

地

「電光石火の影の中には。生死の去来を見る事。始めて驚くべきにはあらねども。幾世の夢とまとはりし。仮の親子の今をだに。添ひはてもせぬ道芝の。露のうき身の置き処。

シテ

「誰に問はまし旅の道。

地

「是もうき世の習ひかや。

クセ「悲しみの涙眼にさへぎり。思ひの煙胸に満つ。つ
ら／＼之を案ずるに。三界に流転して。猶人間の
妄執の。晴れがたき雲の端の。月の御影や明らけ
き。真如平等の台に。至らんとだにも歎かずして。
煩惱のきづなに。結ばれぬるぞ悲しき。罪障の
山高く。生死の海ふかし。如何にしてか此生に。
此身を浮べんと。実に歎けども人間の。身三口四
意三の。十の道おほかりき。

シテ「されば初めの御法にも。

地「三界一心なり。心外無別法。心仏及衆生と聞く時
は。是三無差別。なに疑ひのあるべきや。己身の
弥陀如来。唯心の浄土なるべくは。尋ぬべからず
此寺の。御池の蓮の。得ん事をなどか知らざらん。
只願はくは影たのむ。声を力の助船。黄金の岸に
至るべし。そも／＼楽しみを極むなる。教へあま
たに生れ行く。道さま／＼の品なれや。宝の池の

水。功德池の浜の真砂。かずくの玉の床。台も品々の。楽みを極め量りなき。命の仏なるべしや。若我成仏。十方の世界なるべし。

シテ「本願あやまり給はずは。

地「今の我らが願はしき。夫の行方を白雲の。たなびく山や西の空の。彼国に迎へつゝ。一つ浄土の縁となし。望みを叶へ給ふべしと。称名も鉦の音も。暁かけて灯の。善き光ぞと仰ぐなりや。南無帰命

弥陀尊。願ひをかなへ給へや。

ロンギ地

「今は何をかつゝむべき。是こそ御子花若と。いふにもすゝむ涙かな。

シテ

「我子ぞと。聞けば余りに堪へかぬる。夢かとかかり思ひ子の。何れぞさてもふしぎやな。

地

「ともにそれとは思へども。かはる姿は墨染の。

シテ

「見しにもあらぬ面忘れ。

地

「母の姿もうつゝなき。

シテ「狂人といひ。

地「おとろへといひ。互にあきれてありながら。よくく見れば園原や。伏屋に生ふる箒木の。ありとは見えて逢はぬところぞ。聞きし物を今ははや。うたがひもなき其母や子に。逢ふこそうれしかりけれ。く。